

SDGsに取り組む各種団体等の特集記事

社会福祉法人 梨雲福祉会（富山市吉作）

特別養護老人ホームやデイサービス施設を運営する梨雲福祉会は、地域の美化活動や女性スタッフが働きやすい職場づくりを力を入れていたこともあり、2019年3月からSDGsの

理念に基づき取り組みを開始した。同会は地域貢献活動として「地域活動プロジェクト」と「食の充実プロジェクト」を進めている。住民によるカラオケ大会

地域との共生を目指す

やパークゴルフ大会などを通じて住民同士のコミュニティづくりや閉じこもりがちな高齢者の外出機会をつくるほか、利用者だけでなく住民に施設を開放し、体操教室「いきいきラボ体操」や地元野菜の販売コーナーを設けている。住民の拠点になる



住民が育てた野菜を販売するコーナー

西部トラベル（富山市太郎丸西町）

「国際ネットワークを広め世昇平和と文化の創造を目的とする」の理念掲げる西部トラベルは、SDGsに共感し取り組みんでいる。環境市民プラットフォームとやま（富山市）と連携

し、県内でSDGsを実践している企業や拠点、地域を巡るとやまSDGsツアーを企画。SDGsコーディネーターでもある社員がツアーを手掛けた。参加者に理想の社会の実現を目指す

旅行を通じ良い社会に

指し何ができるかを考える機会の提供を目指す。今年3月に実施予定だったがコロナ禍のため延期。早ければ年内実施に向けて準備を進めている。感染症予防のため旅行が難しい4月に富山の海の幸を詰めた



上高地でポールウォーキングを行うヘルスツーリズムの参加者

NPO法人 富山県防災士会（富山市呉羽町）

地域の防災や減災に取り組むNPO法人富山県防災士会は、SDGsの視点を取り入れ、会員や地域への理解と普及に取り組んでいる。日本防災士会の中でもいち早くSDGsの考えを取り入れた。2014年4月に

自助・共助・協働で地域を守る

などを対象に年間160回を超える防災教育のほか、研修会や被災地の支援活動を実施している。現在会員266人のうち女性会員は55人で、女性の活躍の場づくりを目指し活動しやすい環境づくりに力を入れる。2017年からは学校安全ア



SDGsへの思い

「『自助・共助・協働』を理念だけでなく地区全体で実現するために、関係団体とのパートナーシップ、連携を柱に目指すベクトルを共有したい」と小杉邦夫理事長は語る。「今後もSDGsに関する取り組みを強化したい」

SDGsへの思い

「SDGsをきれいなことと捉えず、課題に対して取り組み、より良い社会づくりを考えるきっかけになる」と語る村田寛社長。旅行会社としてコミュニティ創出と新しい学びや気づきを得る場づくりを目指す。

SDGsへの思い

「福祉を担う法人としてSDGsを理解し実践することが大切」と語る林一枝理事長。全スタッフにSDGsへの理解と共有を図る。「地域とのつながりが何より大切。利用者、住民に喜ばれる拠点を目指す」との思いが全ての取り組みの原点だ。

SDGsに取り組む各種団体等の特集記事

富山県生活協同組合 (富山市金屋)

代表理事 寺岡富美夫さん



全ての事業の基礎

人のつながりや助け合いを大切にするとSDGが目指す社会像と親和性は高いですね。

文化や人種など関係なく、地域と県民の暮らしを支えるのは、我々の努めです。県生協が加盟する日本生協連は2018年6月に「コトSDG」行動宣言を採択しました。SDGの目標は、ある意味では生協の活動そのもの。全ての事業の基礎だと考えています。

生協が提供する商品・サービスは「食」と切り離せません。SDGの定める目標も「食」と密接です。

環境や社会に配慮した商品を選ぶ「エシカル消費」を提案しています。例えば、プラスチックを減らした商品や、発展途上国の生産者と適正価格で取引するフェアトレードのコーヒーや紅茶を販売しています。エシカルな商品は年々増えており、昨年度の売上は前年度の3割増になりました。

また、日本全体で高齢化が進んでいますが、高齢者向けの配食サービスも好評を頂いております。これは食の提供の意味合いだけでなく、地域見守り協定を結ぶ、利用者の様子に異常があれば、行政に届けています。



高齢者のための配食サービスの車

「相食」はSDG5について理解を深めてもらっています。

SDGを身近に感じてもらったため、環境関連の取り組みに挑戦するベンチャーや、エシカル消費をテーマにしたクロスワードクイズを掲載したチラシを独自に制作し、配布しました。参加者は学んでもらうきっかけになったようです。

みどり共同購入会 (富山市泉景)



無添加食品などを提供する

安心な食品の提供を

富山、石川両県に住む800人以上の会員宅に無農薬栽培や無添加などえりすりの産直商品を届け、会員と生産者との交流を進めている。フードマイレージの観点から、有機バナナ以外の商品も案内している。

塩化ビニール系の包装などはせず、専用の箱でそのまま会員宅へ。会員が事前に予約した商品だけを仕入れるため、余剰在庫や賞味期限切れによる食品ロスを未然に防止するなど環境負荷軽減を徹底する。水産品は国内の天然魚を扱い、国産材を使った雑貨も取りそろえる。産地見学や食の体験教室などを通じて、会員と生産者との交流にも力を入れる。

SDGsへの思い

全国の有機農家と提携し土壌を守る活動を行うなど、活動は多岐にわたる。「事業を通じて、消費者と生産者相互の幸せに貢献したい」と金谷敏行社長は語る。



対面販売しながら住民の安全を見守る「とくし丸」

アルビス (射水市流通センター水戸通)

食品スーパー「アルビス」は、食品ロスや食品廃棄物の削減に注力している。県と「とくし丸」や「とくし丸」を昨年から実施し、納品期限の基準を従来の「1/3ルール」から「1/2ルール」に変更した。土用の丑や恵

地域に根差し社会に貢献

方巻きは予約販売を強化し、過剰発注や売れ残りを抑えている。食べやすいハーフサイズも充実させている。

健康セミナーや相談会を定期的に行い、健康を意識しやすい環境づくりに努めている。多様な働き方を認める「限定社員制度」も導入した。

6月に富山市北部地域でスタートした移動スーパー「とくし丸」は、買い物物の不便を解消するだけでなく、高齢者の見守りにもつながっていると好評だ。地域に根差した取り組みを今後も続け、持続可能な社会を目指す。

SDGsへの思い

「地域に支持される事業を続けることが、SDGsを達成することにつながる」と語る石田康洋取締役執行役員。全従業員に、アルビスで働くことがサステナブルな社会を作っていくという意識の共有を図る。

SDGsに取り組む各種団体等の特集記事

光陽小学校 (富山市二口町)

光陽小学校では、SDGsとESD (持続可能な社会の担い手を育てる教育) を組み合わせた指導計画を立て、家庭や地域と連携しながら環境学習やエネルギー学習、国際理解学習などを行っている。

その一つが「ESDパスポート」を



児童がESDパスポートを使って主体的に取り組む

地域とつながる機会を増やす

使った取り組みだ。同校では全児童がこのカードを携帯。エコキャップ回収やゴミ拾いを伴った歩こう会、草むしりなどのボランティアに参加すると「1ボラン」というシールを獲得でき、カードに貼っていく。目標は15枚。子供たちはゲーム感覚でエコ活動や環境美化への理解を深めることができる。

自然愛護学習では、校内にあるヒオトープで生態系を学んでいる。また、近所にある布瀬南公園に整備されたヒオトープも地域の清掃・管理に4年生児童が協力をしている。

「学びを通して人やモノ、地域と積極的につながることを促していきたい」と岡崎佳子校長。今年度はコロナ禍の影響で座学中心になっていたが、今後はできるだけ外で学ぶ機会を増やしていく予定だ。

藤ノ木中学校 (富山市日俣)

藤ノ木中学校では、現2年生(160人)が入学した昨年4月から3ヵ年計画で「SDGsは未来からの宿題」と捉えて活動に取り組んでいる。

1年目はまずSDGsの17項目を理解。夏休みの課題で富山市内の企業がどのようにSDGsに取り組んでいる



ダイバーシティとやまで留学生と交流を図った

SDGsを3ヵ年計画で学ぶ

のかを調査。校外学習を実施し、市の協力で選んだSDGs推進企業・関係機関16カ所を訪問し、現状や課題などをレポートした。「NGOダイバーシティとやま」を訪問した生徒は留学生との交流を楽しみ、多文化共生を体感。「えごまプロジェクト」を見学した生徒は地域活性化や6次産業化について学んだ。

2年目となる今年度は、10月9日には校外学習として岩瀬浜の海岸清掃を行い、海の自然保護やゴミ分別などの理解を深める予定だ。

「1年目は何のことが解らなかった生徒が多かったが、最近は身近なことから行動しようという意識が浸透してきた」と2年担任の工藤純教諭。3年目となる来年は、生徒それぞれが目標設定し、日常のなかでSDGsを実践していく1年とする。

を紹介。総合学習の一環として実践していった。

4年生は、地球温暖化防止に向けた活動「とやま環境チャレンジ10」に参加。通学路に落ちているプラスチックごみを拾い、分別処理することで、環境美化や海洋保全への意識を高めた。また6年生は、一人一人が関心のあるテーマについて調べ、分かったこと、自分ができることをまとめたレポートを作成。学校ホームページの「子どもレポート」コーナーでも発信を始めた。

深井美和校長は「SDGsというと、何かやらないといけない」と構える人が多いが、実は元々やっていることもたくさんある。子供たちにはこの活動を通して、世界の中の自分という視点を持ち、SDGsを自分ごとにしてもらいたい」と話す。

倉垣小学校 (富山市布目)

コロナの流行により、小学校では多くの行事が中止になった。しかし、倉垣小学校ではこの状況を「ピンチはチャンス」と捉え、SDGsを学ぶ時間に充てることにした。まずは、臨時休業中に教員の研修を行い、学校が再開した6月、「学校だより」でSDGs



SDGsに関心をもち主体的にゴミ拾いと分別をする児童

自分ができることから実践を

SDGsに取り組む各種団体等の特集記事

SDGsインタビュー

富山市民病院

病院事業管理者 石田 陽一さん



「SDGsの目標のうち健康・福祉の分野は私たちの暮らしの根幹に関わります。新型コロナウイルスの感染拡大で、地域医療に注目が集まりました。」

院内感染という事態を経て、改めて利用者に信頼される体制整備を進めています。プレハブの発熱外来を8月に開設し、12月には院内に常設の発熱外来を設置する予定です。また事務職を含めた全職員の感染予防対策の教育に力を入れています。

求められるのは感染対策と通常診療を高いレベルで両立できるようにする改革です。例えば、感染拡大時には

病床の入れ替えや配置を工夫することで日常診療の継続を図ることになります。さらに今後は院内のネットワークに情報を整備し、オンライン診療などのICTの活用を進めていきます。

日頃から地域の健康増進への支援も欠かせません。富山市まちなか総合ケアセンター内で毎週「ふれあい健康講座」を開いており、今後もし介護予防や事故改善などを分かちあ

地域医療の質向上へ



8月に開設した発熱外来

すく紹介し、健康づくりのサポートに努めます。

「職員の働き方改革も急務です。病院は女性が多い職場ですので、県内でいち早く1983年に院内保

育所を整備し、子育て世の育児環境実に取り組んできました。今後はさらに仕事と育児の両立支援に努めていきます。

労働時間を短縮するため、業務の質向上に取り組んでいます。

移管と協働化を進める「タスクシフト・タスクシェア」や、各部署間の仕事の標準化に取り組んでいます。さらに研修にオンラインを活用するなど、時間の有効利用を通して労働環境の改善を図っています。

「住み続けられる豊かなまちづくりには、求められる地域医療とは、利用者の視点に立ち、患者、家族と一緒に病気に立ち向かう病院であることが重要です。今は、医師会に貢献できます。今は、医師会保健所・行政機関とのパートナーシップを強化し、スピーディーな感染症医療を提供していくが、これには向けていかなる脅威も打ち勝つレジリエントで豊かな地域づくりのために、地域医療のさらなる質向上に取り組んでいきます。」

一般社団法人 富山医療従事者支援団体



医療従事者に手厚く支援

新型コロナウイルスの感染が拡大した今春、医療従事者の物資不足や帰宅困難者の問題がクローズアップされた。こうした人々を援する目的で県内の経済人や医師、弁護士、議員、教育者、飲食業者ら約30人が一般社団法人「富山医療従事者支援団体」を立ち上げた。

活動は富山市民病院の院内感染が急増した4月、経営者有志が井田勇樹氏（富山市民病院）が中心となり、寄付を募ってマスクや防護服を購入し提供。第2波に向け備蓄にも取り組んだ。支援の輪は徐々に広まり、弁当配達には市内の飲食店26店舗が協力。これまで1700食を届けた。7月には医療、福祉、教育の現場をつなぐセミナーも開催した。

源和之代表理事は「活動を通して共助の大切さを再認識し、助け合うことで喜んでもらえるという幸せを実感できた」と話す。感染拡大に備え、医療従事者の宿泊・保育施設の整備や心のケアの準備を進めている。

並木薬品（富山町）

研究・分析機器や試薬などの専門商社「並木薬品」は、「リカクホールディングス」の一員として2018年から研究機器のリサイクルネットワークに参画し、高額な研究機器を安価で提供するサービスを行っている。

異業種3企業の連携によるサービスで、企業や大学研究室で使わなくなった研究・分析機器を買い取り、メンテナンス後、中古機器の検査サイトでリサイクルに提供。並木薬品は機器の買い取りと販売の窓口を担っている。

「さまざまな機器がその用途を終え、廃棄されている。自社に関わりのある製品には最後まで責任を持ちたい」と森本孝之社長。上質な研究機器が新品より格安で買えるため、予算制限のある大学研究室などから重宝されている。また廃棄物削減にも貢献できると

研究機器をリサイクル



研究・分析機器のリサイクルに力を注ぐ

評価され、今年3月、文部科学省「研究支援サービス・パートナーシップ」に認定された。

森本社長は「これに要するべくも、別の場所ですべての機器がたかさんある。捨てる前に声掛けしてほしい」と話す。

SDGsに取り組む各種団体等の特集記事



チキンの商品を使った料理を
味わう子どもたち

運動・食事で子どもサポート

「コロナ禍で子どもたちに会えないが、近々一緒にカレーを食べるのが楽しみ」と椎名選手。今後も全ての支援活動をリンクさせながら、SDGs活動の輪を広げていきたいという。



椎名伸志選手（カターレ富山）
カターレ富山の椎名伸志選手は、ケンタッキーフライドチキンを運営する日本KFC（横浜市）と富山県社会福祉協議会の協力を得て県内の「子ども食堂」に調理済みの「オリジナルチキン」「骨なしケンタッキー」を使った料理を提供。子どもたちに笑顔を届けるとともに、食品ロス削減に貢献している。椎名選手は以前がで入院した際、



植物工場で水耕栽培に取り組む様子

共生社会創造へ就労支援

を理念に掲げ、障がい者や難病などで一般企業で働くことが困難な人を対象にした、就労継続支援A型事業を展開している。
障がい者らは、農福連携として植物工場でのエゴマやルッコラなどの水耕栽培、リサイクル中間処理場での缶や瓶、ペットボトルなどの分別、高齢者福祉施設での清掃、事務所でのデータ入力やパソコン業務などに携わる。
石橋隆二代表理事は「皆さんは高い労働意欲を持ち、自分自身を成長させようと思っている。労働は社会につながることで自分自身を高められる尊厳と権利。寄り添い、見守りながら一人一人のニーズに応え、共生社会をつくり上げていきたい」と力を込める。



七五三の着付けをする広野さん
（イチゴイニシアチブ提供）

養護施設の七五三お手伝い

養護施設の5歳児に七五三の着付けとヘアセットを行い、一緒に日枝神社を参拝し記念撮影した。
活動は、東京に本部があるボランティア団体「イチゴイニシアチブ」が10年前に始めた。親と暮らせない子どもたちに七五三や成人式などの思い出づくりをサポートしている。
広野さんは、イチゴイニシアチブの代表・市ヶ坪さゆり氏と長年交流があり、活動を手伝ったことを機に「富山でもやりたい」と思うようになった。
「活動をネットニュースに載せたら、私も手伝いたい、着物を譲りたいという声が寄せられた。今後も協力者のネットワークを広げながら、一人でも多くの子どもを祝福していきたい」と広野さん。これからも息の長い活動を続けていくという。



SDGsに取り組む各種団体等の特集記事

ダイバーシティラウンジ富山（富山大学文学部）

LGBT（性的少数者）への理解を深め、多様性のある社会を実現。北陸でいち早くダイバーシティ宣言を掲げた富山大学は、性の多様性に関する啓発を進めている。2015年秋には人文学部の林夏生准教授が中心となって、多様性について学び考える場づくりをスタート。悩みを持つ当事者だけでなく、教育現場や行政職員に向けた講演会などを積極的に進めている。

全ての人が「自分らしく」



多様性について学び合う「やわカフェ」の参加者ら

家族や親戚、知り合いから『早く結婚して子育てを』と言われるのがつらく、自分を責め悩んでいる人も多いのが現状」とみる。

富山が全ての人にとって「暮らしやすい街・帰れる故郷」になるよう、2017年に富山大学文学部内などで「やわカフェ」をスタートした。学生はもちろん、地域住民も集い、さまざまなセクシュアリティを持つ人、学びたいと考える人が本音で語り合える場となっている。カミングアウトしていない人の悩みや気持ちを表した写真展を企画。行政や全国各地の団体と密に連携も図っている。

林准教授は「特に中高生の当事者からは、どこにも居場所がないという声が多く聞かれる。全ての人が人権が適用され、誰もが安心して生きられる、公正な世の中になることを願っている」と語る。

星槎国際高等学校 富山キャンパス（富山市新富町）

星槎国際高校富山キャンパスは、通信と通学を組み合わせた学校で、過去に不登校を経験した生徒、他の高校から転校してきた生徒も通う。173人が在籍し、週5・1日までの生徒自身が登校日を決め、それぞれの目標達成に向けて学ぶ。飯田良智キャンパス長は「一人一人に応じた学びができる学校スタイルが特徴」と話す。

「共感理解教育」を実践



ベトナム共和国と日本とのつながりについて発表する生徒

以外にも部活動や課外授業などを通して笑顔、勇気、自信を育んでいる。「偏差値ではなく、生徒の『変化値』

を大切にしている」と飯田キャンパス長。大学・短大や専門学校への進学、就職など卒業後の進路は幅広い。流しそめん行事、紙芝居の読み聞かせ活動、まちなかの物販、eスポーツ交流など、地域に溶け込んでいる。セミや課外活動はコミュニケーション力の育成にもつながっている。11月にはSDGsの視点でアフリカのベトナム共和国について調べ、遠く離れた国と日本、富山県とのつながりについて学んだ。学習内容は全国の学習センターと結んだオンライン発表会でプレゼンし、広い視点で行動することの大切さを訴えた。飯田キャンパス長は「生徒の成長をかなへ、さらに地域に貢献する学校、環境をつくらなければならない」と力を込める。

共同生活寮「ピースフルハウスはぐれ雲」（富山市万願寺）

農作業や共同生活を通じて不登校や引きこもりの若者を支援する施設「ピースフルハウスはぐれ雲」。主宰の川又直さんが「子どもを育むのは地域」を理念とし、1988年に合宿型自立支援塾を開設した。現在18人が共同生活し、これまで400人以上が暮らし集立っていった。川又さんの取り組みは小説になり、映画「もみの家」のモデルとなった。寮生は共同生活を通じて、仲間との関わりや生活スタイルを身に付ける。農作業をしながら学ぶ中で、人との距離感を理解し協働の意識を芽生えさせるなど、年月をかけて自立

農作業で若者自立支援



農作業をしながら共同生活を行う寮生

へのサポート力と生活環境を築いてきた。施設の近くにある直販店「ファーム・ファーム」では寮生が収穫

した農産物を販売。また栽培したソバや無農薬野菜を使ったメニューを提供するレストラン「くるが」も運営する。毎週土曜には店頭で野菜市を開き、地域住民との交流を深めるなど、地域との共生を進めている。川又さんが設立当初から取り組む「農福連携」の実績から、本年度の厚労省モデル事業に採択された「生活困窮者を対象とした合宿型就労体験プログラム」には、県内外から参加者を集めている。川又さんは「この拠点を多くの人に知ってもらって、富山に人を呼び込み、移住したくなる環境をつくらたい」という。これからも自立支援と地域の活性化に貢献していく。



SDGsに取り組む各種団体等の特集記事



オンラインを活用する編集会議

有限会社 青青編集（富山市間屋町）
記念誌や個人出版を多く手掛ける青青編集は、社員の6割を女性が占めている。編集業務は専門性が高く、業務スケジュールを自らの采配で進めることが多いことなどから専門業務型裁量労働制を導入。自由度の高い働き方を通して、子育

自由度の高い働き方を推進

てや介護をしている社員の仕事と家庭との両立を後押しする。
子育て情報誌「はっぴーママ」の編集には10人以上の外部スタッフが関わっており、全員が子育て世代の女性。子連れでの打ち合せや自宅でも仕事ができるようにと早くからクラウドでの原稿管理や編集を行うシステムを導入。コロナ禍によりオンライン会議の活用も開始した。スタッフが会社に来るのは月に1、2回で済むようになった。
はっぴーママの副編集長を務める島田遥さんは「子どもが急に熱を出しても優しくサポートし合える職場環境はありがたい」と話す。同社は、今後も家事や育児シエアの重要性など笑顔の子育て家庭を増やすための情報発信を積極的に進める。



キャリア形成の在り方を学ぶ女性社員

異業種交流でダイバーシティ推進

（富山市）
回のセミナーや交流会には、各社の女性社員を中心に毎回約30人が参加する。毎回3社で協議しテーマを設定し、幹事社持ち回りで運営する。これまで「営業女子でキャリアアップ」や「子育て社員のキャリア研修」など女性社員を対象にしたセミナーのほか、イクボスを支援する「パパと子供の料理教室」「アンガーマネジメント」をテーマに実施。今年1月には無意識の決め付けや思い込みを打破する「アンコンシャス・バイアスセミナー」を初めてオンラインセミナーで開き、県外で勤務する社員も参加した。
北陸銀行で事務局を務める矢田衣子ダイバーシティ推進室長は「参加者の『明日からも頑張ろうと思います』という声を聞くことがうれしい」と話す。今後も異業種交流を通じ、誰もが活躍できる職場環境やワークライフバランスの充実、モチベーションアップにつなげていく。

※「イクボス」とは、部下のワークライフバランスを応援しながら自らも仕事と私生活を楽しむことができる管理職などのこと



顧客先でフロアマットを交換する社員

データ活用で働きやすさ追求

ることで、誰もが即時に対応できる体制に変更。作業効率の向上と繁忙日の解消につながり、取引先への満足度向上を目指す。
また、午前8時〜午後5時だった勤務時間を午前8時半〜午後5時15分に変更し、土曜休暇の取得を推進。子どもの保育園への送迎や帰宅のラッシュ時を避けるように努めるなどワークライフバランスを重視する。女性社員の産休や育休の支援、長時間労働の抑制を積極的に進め、県の「働き方改革モデル企業」や国の「健康経営優良法人」にも選ばれた。
浅野雅史社長は「社員同士で意見を出したからこそ、一人一人の意識が変わった。今後も改善のサイクルを通じ社員、お客さま取引先すべての幸福度を上げていきたい」と、これからもデータを活用しDXを追求していく考えを示した。

※デジタルトランスフォーメーション



SDGsに取り組む各種団体等の特集記事

トヤマファーマーズマーケット (富山市八尾町黒田)

障害者の就労支援施設を運営するフオーレスト八尾会は、鮮魚や野菜を販売する黒崎屋(富山市)、看板制作の



多くの来場者でにぎわう会場＝県総合運動公園

ハマ企画(同)と共同で、環境に配慮した農産品や加工品、エコ雑貨などを販売する「トヤマファーマーズマーケット」を開いている。今年7月に続き、9月26日にカタレ富山と初めて連携

環境配慮の野菜や食品を販売

し、ホーム戦に合わせ県総合運動公園で開催した。同会の杉山久美子さんが滋賀県の福祉事業所を視察した際に、ファーマーズマーケットの試みを知り、富山市内でも企画したいと考えた。SDGsの勉強会で知り合ったハマ企画に相談、黒崎屋を交えて実行委員会を結成し

た。農家や生産者の応援につながり、消費者に気持ち伝わるマーケットを目指している。

9月のマーケットには有機栽培農家などの野菜や果物、手作りのパンやお菓子、エコ雑貨などを販売する23店舗が出店。カタレサポーターや家族連れら大勢の買い物客が出店者との対話や買い物を楽しんだ。「来場者には、生産者の思いなど背景にあるものを伝えたい。活動を通じて生産者と地域の循環を育みたい」と杉山さん。今後も農家と消費者をつなぐ場として1年に4回程度の開催を目指し、取り組みを継続させていきたいと考えている。

SOGAWA BASE (富山市総曲輪)

県内の特色ある鮮魚店や精肉店、青果店、飲食店が集積する商業施設「SOGAWA BASE」は、「食のコ



選りすぐりの食材や商品が並ぶ店内

ンパクトシティー」を目指し、食とコトが集まり、持続可能なまちを共創する空間としてにぎわいを見せている。上市の黒毛和牛、氷見や新産産の魚介類、これらの食材を使ったこだわりの

地域の食と共創の拠点

カレーやイタリアンなどが楽しめる。全店舗が県内の生産者から優れた食材を仕入れ、地産地消のみならず季節感と生産者の顔の見える売り場をつくり出している。地域経済の循環と環境に配慮し、各店舗が一緒に食材を仕入れたり、コラボしたりしたメニューを提供。食を通じてさまざまな人が集う

共創の場づくりを目指す。マネジャーの蛭谷耕太郎さんは「近くのを提供することで、経済的なコストや環境的な負荷は抑えられる。何より生産者の顔が見えることが信頼感につながる」と話す。青果店では賞味期限が迫った野菜を

シロップにしたかき氷を販売し、ピザ店では余った具材を料理教室に利用するなど、フードロス削減にも力を入れる。この他、県内外の作家が作った器の展示会をはじめ、さまざまな体験イベントを開くなど、まちなかを楽しくでもらうことで、まちの共創に向けて取り組みを進めている。

飲食店×ママスキ (富山市町村)

子育て世代向けの情報サイトを運営するママスキは、富山市内外の飲食店に乳児用椅子「パンポベビーソファ」を贈り、子連れ客でも安心して飲食店を利用できる環境をサポートしてい



「パンポベビーソファ」を利用し食事する親子

子連れ客の店利用サポート

る。椅子は首が据わる時期から14カ月までの乳幼児に対応しており、正しい姿勢で安全に座ることができると人気が高い。

子連れ客が楽しい食事をできるように

ママスキがパンポなど幼児用品を輸入販売する「ティーレックス」(大阪府)に相談、同社が商品の箱に傷のある規格外商品を提供した。ママスキのサイトでは、パンポを寄贈した21店の情報を紹介している。

店でパンポを設置するハッピーダイニングジョワ(富山市赤田)の福田喜

章代表は「パンポがあることで安心して利用してもらうことができる。これからも家族連れに優しい店づくりをしたい」と話す。同店ではコロナ禍で消費が減少傾向にある地産産食材を提供しようと、和洋中のメニューを創作するなど生産者支援の取り組みを行っている。

「コロナ禍で外食の機会が減っている中、親子で安心して外食する機会に繋がればうれしい」とママスキの土肥恵里奈社長。輸入販売会社や飲食店との連携を通じ、子育て環境の充実につなげていく。

SDGsに取り組む各種団体等の特集記事

学生団体 New Trail (富山市)

県内高校生と社会人をつなぐ学生団体New Trail(ニョートル)。



「富山県学生構想会議」に参加したメンバーら

が今年7月に結成された。メンバーは高校生11人と大学生、社会人メンターの13人。これまで市長らとの意見交換会や学生同士のディベート交流会を開催したほか、SNSで考えを発表し合ってきた。

をテーマに、メンバーは「大学の選抜肢が少なく」「富山に戻りたいと思えるまちづくりを」「べきだ」などの意見を発表。藤井市長からまちづくりへの考えを聞いた。メンバーは地域の未来像について学び、異なる世代や立場の人との対話の重要性を実感した。

高校生と社会をつなぐ懸け橋に

今年9月に県内の高校生団体「Teena Light(ティナライト)」と合同で、藤井裕久富山市長や複数の県議と富山の課題について話し合う「富山県学生構想会議」を開催。「若者の県外転出と人口減少」

結 i to g u c h i (富山市五福)

今年10月に結成したサークル「結 i to g u c h i」はSDGsをテーマにさまざまな地域課題に取り組んでいる。メンバーは富山



廃材を活用したツリー型のオブジェを作るメンバー

大学の国際交流サークルで知り合った弥生一沙代表(人間発達科学部3年)と渡辺咲耶さん(皆川軸さん)ともに芸術文化学部1年)の3人。アートやデザインを通じて「地域課題にポジティブかつ美しく取り組む」

どのリサイクルを進めるため、出品してくれた学生に葉っぱの形にした紙にメッセージを記入してもらい、受け取る人には紙の裏側にSDGsへの思いを綴る。廃材で作られたツリー型のオブジェにメッセージが書かれた紙を付けることで、アート作品としても楽しめるようにする。ほ

アートをいかし課題解決目指す

をモットーに活動している。主な取り組みは、フードロスの削減、衣料や本、食のリサイクル、コンタクトレンズケースの回収の三

かに使用済みのコンタクトレンズケースのプラスチック部分をリサイクルする活動にも取り組む。

つ。学内にコンポストを設置し、学内の食堂などで出た生ごみや落ち葉を混ぜてたい肥を生成することで花壇を整備する計画だ。また、衣料な

渡辺さんは「アートやデザインの力で社会に貢献したい」、皆川さんは「富山大学内にもっとSDGsの輪を広げ、メンバーを増やしたい」と話した。

片山学園中学校・高等学校 書道部 (富山市黒牧)

片山学園中学校・高等学校の学園祭が今年10月に開かれ、書道部がS



学園祭で展示した作品

DGsをテーマにした展示とステーション発表を行った。SDGsの17の目標に対して独自のキャッチコピーを考案したり現状の問題を洗い出した

界の課題への気持ちを表現した」と語る。境さんは目標3の「すべての人に健康と福祉を」のキャッチコピーを「灯火」と色紙にしたためた。「世界には十分な医療を受けられず亡くなる子どもがいる。命はかな

書に未来への思いを託す

の思いを書に込めた。

が揺らめくような書体にした」と話す。

境夏実部長(高校2年)は「世界で起きている問題に興味があり、自分たちも何かしたいという気持ちからテーマを決めた。部活動を通して書道は人に思いを伝えられる芸術であると実感し、自分たちの方法で世

部員が考えを力強く示したこと、で、展示・発表は多くの人から評価を受け、自身による発信がSDGsの普及啓発になると実感した。

SDGsに取り組む各種団体等の特集記事



路面電車南北接続を記念し南富山駅前で開催されたイベント！2020年3月21日

南富山まちづくりを考える会（富山市大町）

富山地鉄の南富山駅周辺地域の住民が主体となり、まちのにぎわいづくりや安心・安全な駅周辺空間の整備に取り組む「南富山まちづくりを考える会」を2016年に結成した。

住民集い駅周辺に活力

周辺の空き家の増加や通過交通量が多いことから高齢者や児童の安全を危惧する声の高まりなどを背景に、まちの魅力向上と住民の地域愛を育み居住人口の増加につなげようと、勉強会やイベントなどを実施している。

これまで、まちづくりアドバイザーを講師に招いた勉強会のほか、今年7月と9月、11月に「キッチンカー富山テイクアウトマルシェ」を開催。堀川小5年3組の児童が今年5月から南富山駅をテーマに学習を進めてきたことから、同校と連携し、児童がマルシェの来場者に地域に関するアンケート調査を行った。富山大や富山国際大などの教育機関との連携も深めている。松山朋朗会長は「人が集まれば活気が生まれる。今後南富山の将来像を、住民を含むステークホルダーと一緒に考えていきたい」と話した。



婦中地域水田貯留推進協議会

富山市婦中町連星・鶴坂・婦中熊野・富川地区

富山市婦中町連星・鶴坂・婦中熊野・富川の4地域は「婦中地域水田貯留推進協議会」を結成し、多発するゲリラ豪雨や台風などの浸水や土砂災害時に備え、水田貯留（田んぼダム）

田んぼダムで水害防ぐ

に取り組んでいる。水田貯留は、収穫に支障がない範囲で雨水を水田や水路にため、河川への流入量を減らして氾濫や浸水を防ぐ役割を果たす。同協議会が取り組みを開始してから雨水を水田にためる水田貯留（田んぼダム）

落水口に小さな穴のあいたせき板を各自が設置する。

同協議会の島崎定則会長は「河川の改修工事で内水氾濫は減ったが、過去の被害を繰り返さないためにもこれからも4地域で協力していきたい」と語った。



住みやすい大沢野・細入を考える会（富山下タ林）

「住みやすい大沢野・細入を考える会」が11月に富山市の大沢野生涯学習センターで開かれ、地域共生をテーマにした講演を通じ、地域全体で包括的に住民の生活を支える取り組みについて考えた。

地域全体で住民の暮らし支える

特別養護老人ホームささづ苑（富山下タ林）の吉野英樹さんが中心になって企画し、自治振興会長や民生委員長、企業、富山南警察署の担当者ら25人が参加し、講師は富山

際大の相山肇教授が務めた。

同苑は、富山市の大沢野や細入地域の家庭を訪問し、在宅での困りごとを抱える高齢者に対して支援を行ってきた。さまざまな悩みを抱える人の話を聞き、福祉だけでなく地域の人の生活を支えるのは難しいと感じるようになったという。

吉野さんは「体の不自由な人や困っている人が安心して暮らせるように、誰もが地元の課題を自分ごととしてとらえ、主体的に考える地域に発展してほしい。将来子どもたちが暮らしたいと思える場所をつくっていきたい」と意気込みを話した。

SDGsに取り組む各種団体等の特集記事



三味線教室を楽しむ参加者

不登校の子どもと親の会 Switch (富山市)

Switch代表をつとめる小澤妙子さんは、息子の不登校をきっかけに、2019年に会を結成した。親子参加のお菓子作りや交流イベント、クリスマス会のほか、親同士が不登校について

子どもと親の居場所つくる

て学び、情報交換を行う勉強会など子どもと親それぞれが安らぎや交流につながる活動を行っている。これまで決まった活動場所がなかったが、昨年5月から富山市大沢野地域にある旧小羽小学校を拠点とし、「子どもの居場所」づくりに取り組み、イベントや活動は県内の約70〜80家族に案内し、参加を



イベントの構想を話し合う(左から)川原さん、水馬さん、明葉講師

富山短期大学 学生有志 (富山市)

富山短大幼児教育学科の学生有志6人が、児童虐待防止を訴えるオレンジリボン運動に取り組んでいる。メンバーは富山短大幼児教育学科講師の明葉聰史さんのゼミ生が中心で、まずは児童虐待について地域や多くの人に知ってもらうことが重要と考え、啓発活動に力を入れている。

児童虐待防止に向け啓発活動

昨年11月の「児童虐待防止推進月間」には、ハンドボール日本リーグ女子のアランマールの試合会場で、募金活動や運動のシンボルであるオレンジ色のリボンを作るワークショップのほか、虐待防止について考えるオンライン子育て支援イベントを行った。また、大学構内に設置した募金箱などから寄せられたお金で、富山県立乳児院で暮らす乳児に絵本やタウンジャケットを贈る活動も行っている。

虐待防止について考えるオンライン子育て支援イベントを行った。また、大学構内に設置した募金箱などから寄せられたお金で、富山県立乳児院で暮らす乳児に絵本やタウンジャケットを贈る活動も行っている。

メンバーで同科1年の川原千歩さん



被害者のサポートについて話し合うメンバー

NPO法人 ハッピーウーマンプロジェクト (富山市)

NPO法人ハッピーウーマンプロジェクトは、女性と子どもが健康で安心して暮らせるための活動を行っている。取り組みの一つとして、パートナーからの家庭内暴力(DV)の被害者

DV被害から親子を守る

とその子どもを支援している。公認心理師や助産師のほか、医師、教員、保育士などが心身のケアや生活、就労をサポートし、安心して暮らせる生活への移行に向けてさまざまな支援を行っている。

小林涼子理事は「暴力から逃れるため、家から離れた後に心身の不調が出る

る被害者親子も多い」と現状を説明。支援の内容は被害者の状況に合わせたきめ細やかな対応が必要になる。

昨年4月には虐待などの被害に遭った女性や子どもを一時保護する県内初の民間シェルターを設立した。児童虐待やDV被害をなくすためには、男女